

[研究室紹介]

九州産業大学工学部土木工学科
計画系研究室

山下三平

はじめに

九州産業大学工学部は、1960年設立の九州商科大学の改称と学部増設に伴い、1963年に機械工学科、電気工学科、および工業化学科の3学科をもってスタートした。翌64年には建築学科と土木工学科が加わり、現在の5学科体制が整った。また、大学院は1973年に工学研究科の5つの専攻（機械工学、電気工学、工業化学、建築学、および土木工学）の修士課程が発足し、現在に至っている。

その後、1992年に大学への社会的要請の変化に対応するために、大規模なカリキュラムの改正がおこなわれた。土木工学科では、その改正の際に、「建設コース」と「計画デザインコース」の2つのコースが設置された。前者には構造系、水工系、基礎系、および材料系のカリキュラムが含まれる。一方、後者の設置に伴い、その前年からこれに関連する2つの研究室が新設された。これが本学土木工学科の計画系研究室の始まりである。

土木工学科の教員は、現在、教授7名、助教授2名の9人である。この中で計画系の教員は、発足当初は2名であり、2つの研究室であったが、教員転出に伴い、現在は1名のみとなっている。学生数は、各学年約160名であり、建設コースと計画デザインコースの人数の比率は約3対1となっている。また、大学院への進学者数は、毎年約10名であり、それを除く卒業生は、約80%が建設業とコンサルタント業、約10%が公務員に就職している。

計画系のカリキュラム

前述のような1992年の大幅なカリキュラム改正に伴い、計画系の科目がとくに強化された。計画系の学部専門科目としては、「計画デザイン概論」「計画デザイン演習」「景観デザイン」「建設デザイン」「地域開発計画」「ウォーターフロント計画」「都市再開発計画」「環境工学」「交通計画」「コンピュータグラフィックス演習」などがある。また、大学院では、「都市計画学特論」「交通計画学特論」「土木景観計画特論」などが開講されている。計画系のコース名に表されているように、デザインあるいは景観に関する科目の充実が特徴である。

研究活動

計画系研究室は1991年度の発足当初から1994年度ま

で、「地域・都市計画学研究室」（吉武哲信氏（現在宮崎大学工学部）担当）と「環境計画学研究室」（山下三平担当）の2研究室体制であったが、本年度は後者のみとなっている。研究活動を示せば以下のとおりである。

現在研究室は、山下の他に職員として副手が1名、M2が2名、4年生が23名の合計27人で構成されている。研究は主に河川的环境評価と景観論に関するものである。山下の研究生活の出発点が「流出解析法」の研究であったこともあり、河川を対象とした研究にこだわりつづけている。またその関心が、もともと広く人間と自然との望ましい関係とその実現や回復のための人間の意識・心のあり方の追究にあったため、景観工学的な知見をベースにしつつも、現在までのところ、どちらかというとして操作論的・工学的な面よりも、意味論的あるいは現象学的・解積学的な面に研究の重点がおかれている。このため、学生と研究の地平を共有するのはいつも困難がつきまとうのであるが、彼らが人間の真相に触れない「上空飛行的思考」（M. ポンティ）になれきってしまわぬように、配慮しているつもりである。

具体的には、今までのところ、筑前・福岡の都市河川と、筑後地方の柳川堀割ならびに田丸の河川・水路網を対象にし、「写真投影法」による一種の住民意識調査を行っている。これは沿川住民に身近な河川環境をカメラで撮影してもらい、その写真の検討をとおして、環境の状態と、そこに「投影」された人々の心情とを、ともに把握しようとするものである。また被験者として成人だけでなく子供も比較対象として選んで、景観と生活の時間的変遷についての検討を行っている。このため調査の際には、小学生に対してその方法をわかりやすく説明しなければならず、研究室の学生にとって、その意味でも貴重な体験をすることができたようだ。また、多くの小学校で、子供が川で遊ぶことは禁止されており、「環境教育」の必要と、その困難や限界についても考えさせられた。

今後は時間的に「縦断的」な調査と歴史的な資料調査を地道に続け、景観の変遷と、その人間にとっての意味を、「環境倫理的論点（とくに世代間倫理的論点）」を交えて追究していくことを考えている。

おわりに

1993年の土木学会全国大会では九州産業大学がメイン会場となったため、その際に土木学会関係の多くの方々には、大学の地理的・空間的なようすや設備について、知ってもらう機会をもつことができた。しかし本学の計画系研究室については、発足してまだ日が浅く、研究・教育の内容の充実が今後とも必要である。驚くべき災害や事件が相次ぐ中、歴史認識の成熟を求めつつ、その充実を追究していきたいと考えている。

(1995.5.22 受付)